

# 浜松研究会報告

## ミュージックサイレンの歴史と現在

●上野 正章  
Masaaki UENO  
京都市立芸術大学

●兼古 勝史  
Katsushi KANEKO  
立教大学

キーワード：ミュージックサイレン、ヤマハ、浜松市、サウンドスケープ、音環境

### 要旨

戦後日本各地の音風景を特徴づけてきたもののひとつにミュージックサイレンがある。ヤマハ株式会社が開発した改良型サイレンで、音程の異なる複数のサイレンを組み合わせて、メロディを奏でることを可能にしたものである。1950年に一号機が完成してヤマハ本社で吹鳴を開始すると、徐々に人気を呼んで各地の庁舎や出先機関、工場、デパート、銀行などの民間施設が導入を試み、のべ184台ものミュージックサイレンが日本のみならず海外にも鳴り響いた。本発表は2018年8月21日に行ったヤマハ本社におけるミュージックサイレンの調査に基づき、後日調査の結果も交えつつ、ミュージックサイレンの歴史と現在を共同で報告する試みである。過去の文献等を参考に初期のミュージックサイレンに文化史からアプローチすると同時に、関係者へのインタビュー等に基づき現状についてまとめた。

### 序

毎日時を報ずる音楽サイレンの美しい音色は楽都浜松の象徴となっている。（1960年代に刊行された『浜松市内観光と産業』）<sup>1</sup>

戦後日本の音風景を特徴づけてきたもののひとつにミュージックサイレンがある。ヤマハ株式会社が開発した改良型サイレンで、音程の異なる複数のサイレンを組み合わせて、メロディを奏でることを可能にしたものである。

本稿は2018年8月21日にヤマハ本社で調査させていただいたミュージックサイレンに関する調査に基づき、後日調査の結果も交えつつ、ミュージックサイレンの歴史と現在を報告する試みである。上野は過去の文献等に基づき、初期のミュージックサイレンに文化史からアプローチした（第1章）。兼古はヤマハ関連企業のミュージックサイレン管理・運用者らからのヒアリング及び後日のアンケート調査に基づき、主として現状と今後の展望について記した（第2章）。

## 1 初期のミュージックサイレン

### 1-1 黎明期のミュージックサイレン<sup>2</sup>

ミュージックサイレンの構想は終戦直後にさかのぼる。きっかけは「生産を再開した楽器工場で働く人々に始業や

終業などを知らせるためにサイレンが必要」<sup>3</sup>だが、サイレンの音は聞く者に戦争の恐ろしい記憶を呼び起こすという問題だった。これに、当時の社長川上嘉市がサイレンの音を改良するというアイデアを出し、製品開発へと進展していったのである。川上死去の際に編まれた『日楽社報』の追悼記事に、当時の開発担当の小野俊が寄せた回想があり、詳細を知ることができる。「終戦後しばらくはサイレンの音は人々の心を縮み上らせたものです。この不愉快な音を楽器会社の名にふさわしくきれいな、そして快い音にするようにと言われたのが故川上会長でした」<sup>4</sup>。

川上には世界戦略としてのミュージックサイレンという構想もあった。試作機が出来上がったときの感想である。「美しい音色のサイレンが出来れば、日本中は勿論のこと世界のすみずみまで、この音楽のサイレンのメロデーを響かせようと大きな抱負をお話しになりました」<sup>5</sup>。同じく小野は、会長の言葉を聞き、次のように解した。「常に世界的視野に立ってヤマハの名を世界に行きわたらせようとされた故会長の遠大な計画の一端がうかがわれました」<sup>6</sup>。

川上は美しく力強い経済でもって世界に再び雄飛する日本を思い描いていたのかもしれない。ミュージックサイレンは妙なる大きい音を発するのみならず、一度据えつけられれば動かしがたいという特徴もある。

試作機のミュージックサイレンが出来上がると、1950年9月から試験運用が開始された。記事は試作機の吹鳴開始を伝えたものである。

7馬力半のモーターにそれぞれ[ママ]音色の違う8穴(A音)9穴(B音)10穴(C音)12穴(E音)の4個のサイレンをとりつけ継電機の回転洞が作曲ベンに作用し、美しいハーモニーをかなでる[。]この試作品は同社屋上にとりつけられ朝7時半の開門から午後6時の閉門まで前後10回吹鳴され市民の耳を楽ませている<sup>7</sup>。

穴というのはミュージックサイレンの内部ドラムとドラムケースに開けられた穴である。ミュージックサイレンは内部ドラムが回転すると一定の時間間隔で二つの穴が揃うように設計され、また内部ドラムには羽根が付いていて外部の空気を取り込むことができるようになっている。ドラムが回転すると取り込まれた空気が遠心力によって圧縮され、穴が開くと空気が噴出する。このプロセスが繰り返され、回転数が閾値を超えると音が生み出される。音高の調

節は穴の数とモーターの回転数で行われ、穴の数が多いほど、また回転が速いほど単位時間当たりの空気の圧縮と放出の回数が増加するから音程は高くなる。1秒あたりのモーターの回転数に穴の数を掛けたものが1秒間当たりの空気の圧縮・放出サイクルの数、すなわち周波数になる<sup>8</sup>。

初期の吹鳴状況は、最初期にミュージックサイレンを報じた『静岡新聞』の記事に詳しい。

始めは朝7時半最終の6時までの間に14回も鳴らされる、1回1分半だが、係りの守衛さんがスイッチを押せば静大教育学部の本間先生<sup>9</sup>が作曲した二節からなる曲がサイレンとなつて吹奏され、その音はちょうどパイプオルガンの吹奏とそっくり、従来の単調なサイレンと異なり非常に情緒的だと好評を博している<sup>10</sup>。

(A音) (B音) (C音) (E音)の4音だけなので、構成できる旋律は限られている。本間の作曲した旋律は、ごく簡単なものだったと思われる。なお、一日に鳴るミュージックサイレンの回数に関して『読売新聞』と『静岡新聞』とでは食い違いがある。試行期間だったので、様々な可能性が試されていたのかもしれない。

ミュージックサイレンの正式運転が始まったのは、同年の12月であった。設置は本社工場4号館である。

26年12月20日日本社工場でミュージックサイレンが吹奏を開始した。川上嘉市会長が戦後、21年から5年の歳月を費やして開発したもので、戦中の思い出につながる従来のサイレンにかえて、美しいメロディを奏でるこの新しいサイレンは販売開始とともに、学校をはじめ各地の公共施設や工場などに設置されていった<sup>11</sup>。

この時点で始めて旋律が鳴り始めたことが判明する。曲名は次の通りである。

表1 曲名一覧表<sup>12</sup>

時刻	曜日		曲目	作曲者
8:00			埴生の宿	ビショップ
12:00			菩提樹	シューベルト
17:00	月曜日/水曜日		家路	ドヴォルザーク
	火曜日		峠の我が家	アメリカ民謡
	木曜日		月の光	ドビュッシー
	金曜日1	一週間 毎に交互	アラベスク	ドビュッシー
	金曜日2		トロイメライ	シューマン
	12月最終稼働日		蛍の光	スコットランド民謡

もっとも、このリストは現行のものであり、新聞記事の引用からも示されているように、導入当初の吹鳴回数は現在よりも頻繁であった。曲名に関しても、おそらく幾分食い違いがあるかもしれない。実際、正月は特別に上眞行作曲、千家尊富作詞の《一月一日(いちげついちじつ)》が演奏されていた<sup>13</sup>。

ミュージックサイレンは、開始早々、浜松でどのように受け止められたのだろうか。当時を伝える貴重な資料に

1953年の『読売新聞』朝刊に掲載された「音楽サイレン楽器の町に鳴りひびく」という読者からの投書記事がある。「私たちの名物」と題した各地の児童が自分の町の名物、名所、特産品等を紹介するコラムだが、浜松の名物としてミュージックサイレンが取り上げられている。記事は近況から始まる。

多くのサイレンにまじって、あの《年の始めのためしとて…》の音楽が各室に鳴り響いています。去年の暮れには《蛍の光》だったのですが、新年からはこの音楽にかわりました<sup>14</sup>。

多くのサイレンが町では鳴っているという当時の状況および、ミュージックサイレンの季節に応じた移り変わりを知ることができる。次いでミュージックサイレンの紹介に移り、ミュージックサイレンが去年から鳴り始めたこと、サイレンが日本楽器製であることに触れた後、「いつまでも戦時中の空襲警報や火事を思い出させるようなサイレンではいけないとあって、会社のおじさんたちが苦心して作られたということです<sup>15</sup>と紹介される。『社史』で綴られたミュージックサイレン開発に寄せる思いが広く一般に知られていることが分かる。記事は1953年で、終戦から8年後の発表である。第二次世界大戦の記憶がまだまだ生々しい。

ミュージックサイレンがどのように聴かれていたのかということに関しても情報を与えてくれる。「お昼のお弁当の時間には「早くあのサイレンが鳴らないかなア」と皆で耳を澄まして待っています。きっと工場で働いているおじさんたちもそうだろうと思います<sup>16</sup>。時報としての活用が判明する。教室に時計が設置されていなかったことが推し量られる。最後の箇所では、ミュージックサイレンに寄せる思いが綴られている。

浜松にはこの日本楽器をはじめとして多くの楽器工場があります。そしてピアノ、ハーモニカ、シロフォンなど、いろいろの楽器を国内だけでなく、広く海外まで輸出しています。——中略——戦時中は軍需工場の町だった浜松も、いまでは日本一の楽器の都として生まれ変わりました。そして浜松の子供たちは、毎日この音楽サイレンを聞いて、明るく楽しく暮らしています<sup>17</sup>。

浜松の軍需産業からの決別と明るい浜松の毎日の暮らしが報じられている。ミュージックサイレンと結びつく平和は、広く新聞読者に共感を呼んだと思われる。また、全国紙に掲載された記事なので、広く日本中の人々がミュージックサイレンを知るきっかけになったと思われる。

## 1-2 ミュージックサイレンの普及

ミュージックサイレンは内外に設置され、最終的には同タイプのもので184台据え付けられることになった<sup>18</sup>。「美しいメロディを奏でるこの新しいサイレンは販売開始とともに、学校をはじめ各地の公共施設や工場などに設置

されていった」<sup>19</sup>。

いくつか拾ってみると、たとえば、1951年、銀座にヤマハ東京支店ビルを新築する際にミュージックサイレンが設置された。「自動的にいろいろな曲を奏でる仕組み[で]、長さ5メートル幅2メートル余、総重量12トン15馬力のモーターで動かすが普通約4キロ、風のないときは約8キロ範囲は聞える」<sup>20</sup>という大掛かりなものであった。銀座7丁目から8キロというと山手線内を覆い、西は荒川に達しようかというほどの広大な領域である。「銀座通りに和やかな音のサイレンが鳴り渡ると、付近のビルの窓は人々の顔が寄り合い、道ゆく人々は思わず空を仰いで驚きの声を上げた」<sup>21</sup>と『社史』に記されるように、大音量は多くの人々を驚かすほどであった。

演奏回数は、朝8時、正午、夕方の3回であり、1分間ずつ毎日吹鳴された。曲名はモーツァルトの《イ短調ソナタ》や《新世界》、《アニーローリー》など数曲で、交互に演奏されていた<sup>22</sup>。

あるいは岸和田市は1954年、市庁舎新築の際に屋上にミュージックサイレンを設置した。全国で6番目のサイレンであり、総工費100万円、12音を発する仕様である。曲名は、朝に島崎藤村の《朝》、昼に《おおスザンナ》、夕は《荒城の月》、祝日には《君が代》が吹鳴された。なお、ミュージックサイレンが選ばれた理由は、「普通のサイレンでは戦時中の空襲サイレンを思い出して恐怖心をあたえる心配がある」<sup>23</sup>ためであった。

1959年には三重県上野市（現在の伊賀市）の上野産業会館屋上でミュージックサイレンの吹鳴が始まった。一日4回で、毎日午前7時と正午には《魔弾の射手》、午後6時には《家路》、午後10時は《おやすみ》である。《おやすみ》は地元桃青中学校の東仁己の作曲で、演奏時間はそれぞれ30秒間であった<sup>24</sup>。

いずれも写真付きの記事で報じられ、サイレン設置を大歓迎している地域の人々の様子を見て取ることができる。

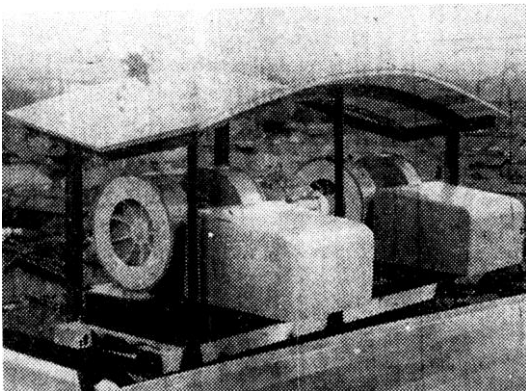


図1 上野産業会館屋上のミュージックサイレン<sup>25</sup>

### 1-3 今後の研究に向けて

その後のミュージックサイレンを簡単に整理すると、1982年の上野市役所への設置を最後にモデルチェンジが行われた。まず、MIDI制御が可能になった。また、素早いシャッターの開閉を実現することによって早いパッセージも演奏できるようになった。純正律に替えて平均律が採用さ

れることによって、転調も容易になり、音域も最大24音まで拡張された。価格は1000～1500万円程度である。

もちろんのこと、さらに広くサイレンが導入されることを期待してのことであっただろう。しかし、結論から言うとサイレンの売り上げは一定数に止まった。一号機との入れ替えも含めて販売台数は全部で12台だった。

理由は様々に考えられる。サイレンを騒音と受け止める人々の出現と漸増。時計の普及等々。提唱したいのが、これらに加えて空襲サイレンの記憶の風化を理由に加えることである。過去の文献にしばしば見出すことができたのが、空襲警報に結びついた従来型のサイレンの記憶を刷新するためにミュージックサイレンが歓迎されたという記述であった。戦争を通じて空襲サイレンの音が広く人々に共有され、同時にこれが否定的な音であったがゆえに、挙ってミュージックサイレンが導入され、逆に、戦争体験の風化に伴ってサイレンへの興味が失われていったのではないだろうか<sup>26</sup>。

(上野正章)

## 2... 「ミュージックサイレン」管理・運用者への聞き取り調査から

### 2-1 楽器としての運用



図2 ヤマハミュージックサイレン初号機につながっていた鍵盤型スイッチ（ヤマハ本社工場にて）

ヤマハ・ミュージックサイレンが、他の公共的時報と大きく異なるのは、それがテープやデータに固定された録音音源の再生による「放送」ではなく、あくまでも「楽器」であるという点だ。音はそのつどゼロから生まれ「吹鳴」（演奏）される。そのことを端的に物語るのが、1950年から81年までヤマハ本社工場の時報として使用された「初号機」（第1世代機）に接続されていた鍵盤型操作スイッチ

だ。ピアノやオルガンと同じ鍵盤の形をしたその装置はそれぞれの鍵盤が各音程のサイレンにつながっており、そこからオンオフのタイミングをコントロールしてサイレンの「生演奏」ができるというものだった(図2)。

生演奏はどのようなときに演奏されたのか。ヤマハ関係者<sup>27</sup>によると「正月に静岡大学の音楽担当教授の方に『一月一日』を生演奏で弾いてもらった。」「年初め(仕事始め)等特別な日に演奏していた。」といった伝聞が残っているという。年始や仕事始めに際しての演奏というのは、単なる時報とは異なる。一種のセレモニーに近いものだ。それが録音・再現によるものではなく、一回性のライブ演奏で行われていた点に特別な意味があったと考えられる。このように儀礼的な「行為」としての吹鳴、という側面を持っていたミュージックサイレンは、やはり音を生み出す器=楽器としての流れを受け継いだ、楽器製造企業ならではのものであったと言えるだろう。

## 2-2 設置場所～地域の音のファサードとして

では、このようなミュージックサイレンはヤマハ本社以外の全国のどのようなところに設置されていたのだろうか。外販第一号機は1951年宮崎大学に納入されたという<sup>28</sup>。

表1<sup>29</sup>は旧型第1世代ミュージックサイレン184台の設置地域・場所の内訳である。これによると、もっとも多いのは市町村役場などの公共物(64台/34.7%)、次いで工場(45台/24.5%)、デパート・商店街(27台/14.7%)、学校(25台/13.6%)、銀行関係(19台/10.3%)、その他(4台/2.2%)の順となっている。1983年に以降に設置された第2世代機は12台が設置されたが、その内訳は、市町村役場8台、工場2台(ヤマハ本社工場の一台を含む)、その他2台だという<sup>30</sup>。こうした内訳から明らかなことは、ミュージックサイレンを購入・使用するのには、その多くが公共的性格を帯びた施設であり、行政や、地域の中である

種の特権的な立場にあったであろう工場や商店街、銀行などの産業・経済の拠点であって、まったくの個人や私企業が導入したわけではないということだ。こうしたことから、ミュージックサイレンが、歴史的な教会や寺院、市庁舎などの鐘、からくり時計などの伝統を受け継ぐ、一種の「聖なる騒音」として、地域に受け入れられていったであろうことが想像できる。言い換えれば、ミュージックサイレンは地域の特権的な施設に導入されることによって、地域の音のファサードとして、シンボリックなものとなるポテンシャルを内包することとなったのである。

## 2-3 ミュージックサイレンの可聴範囲

ミュージックサイレンが現在どこまで聞こえるのか(どこまでしか聞こえないか)については、現段階では広域の実測調査等を行っておらず不明であるが、8月の調査の際に浜松駅付近で観測したところ、夕方17時のチャイムは、浜松駅前(北口)の高台(アクトシティ、ショパンの丘付近)では聞こえなかった<sup>31</sup>。一方で、ヤマハ本社から北東



図3 ミュージックサイレンの周囲を覆う防音版

表2 ヤマハミュージックサイレン(第1世代機)の地域・場所別設置状況(台数と割合)

	公共物 (市町村役場)	工場	デパート 商店街	学校	銀行関係	その他	地域別 設置台数	割合
北海道		4	1		1		6	3.3%
東北地方	1	1	1	1	7		11	6.0%
関東・信越地方	2	6	5	2	5	1	21	11.4%
東海地方	5	17	3	5	2		32	17.4%
北陸地方	4	3	2	3	2	1	15	8.2%
近畿地方	10	1	1	11		1	24	13.0%
中国地方	13	5	1	1			20	10.9%
四国地方	9	2	1				12	6.5%
九州・沖縄地方	19	6	12	2	2		41	22.3%
その他・海外	1					1	2	1.1%
設置場所別 合計台数	64	45	27	25	19	4	184	100.0%
割合	34.7%	24.5%	14.7%	13.6%	10.3%	2.2%	100.0%	



表3 地域の声(2009年ヤマハによる調査の資料をもとに作成)

	年齢	性別	曲の感想	感じること
子供時代(社員)	50	女	好きだった記憶がある	時計代わりにして遊んでいた気がする。(ヤマハの音とは思っていなかった)
子供時代(社員)	50	男	郷愁を感じた記憶がある	遠くから聞こえた。
地元自動車会社経営	60	男	良いですねえ	物心付いたころから聴いている。生活の一部
地元主婦	20	女	悪い感じはしない	夕方のサイレンを聴くと夕飯の支度をしなくちゃと思う

に約 2.5 キロ離れた住宅(戸建)の屋内(二重ガラスの窓辺)で「日や時間、状況によってふと聞こえる」との証言もある<sup>32</sup>。また、過去の音の範囲については、ヤマハ担当者より「以前(昭和30~40年代)は浜松駅以東でも聞こえていたようです。」「市街にビルが建ち並び車も増え都市化が進んだ現在ではかなり聞こえる範囲も狭まっているかと思えます。」「ミュージックサイレンの周辺に高いビルが建ったため、聞こえにくくはなっただと思えます。」という証言<sup>33</sup>が得られた。この他、8月の現地調査の際には、JR東海道線や新幹線、浜松駅を南側に超えた海岸に近い旧篠原村エリアの住民(元ヤマハ職員)から「昔は聞こえていた」との証言もあり、かつては浜松市内のより広い範囲に聞こえていた可能性がある。今後の地域住民への聞き取り調査や、現地での観察調査で可聴領域の変化について明らかにしていきたい。

## 2-4 地域の声

可聴範囲が狭まった可能性があるとはいえ、ミュージックサイレンは地域の中の広域に大音量を響かせる装置である。ヤマハでは、近隣住民や周辺建物の利用者への配慮から近くに集合住宅や学校のある方向には、ミュージックサイレンそのものを金属製の防音板で覆うなどの配慮をしている(図3)。また会社として、定期的に近隣自治会と交流を持っているという。その結果「時には近隣マンション住民よりご意見も多少ありましたが、自治会関係者及び地域住民の中ではこのサイレンに対して故郷の音として大切に受け止めて頂いていると思っております。」<sup>34</sup>との認識に現在はいたっているようだ。2009年にヤマハが実施した「地域の声」に関する調査では、(子供時代)「好きだった記憶がある」「時計代わりにして遊んでいた」(50代女=社員)「郷愁を感じた」(50代女=社員)、「悪い感じはしない」「夕方のサイレンを聴くと夕飯の支度をしなくちゃと思う」(20代女=地元主婦)「物心ついたころから聴いている。生活の一部」(50代男=地元自動車会社経営)といった好意的な声があったという(表2)<sup>35</sup>。

## 2-5 ミュージックサイレンの管理・運用

ミュージックサイレンの日々の運用や管理について、担当者に聞き取り調査を行った結果、現在は、以下のような

管理が行われていることがわかった。

### (1) 管理

- ・日々の稼働時には実際の音を耳で確認(異常があれば対応する)
- ・2~3年毎にオーバーホールを実施(シリンダー、バルブの交換など)
- ・昨年機構部品の取替えなど小規模のオーバーホールを実施

### (2) 運用

- ・毎年の年末(または年始め)に翌年の会社カレンダーに合わせた吹鳴プログラムの書き換えを行う

しかしながら、対外的なメンテナンスはすでに2011年に終了しており、ヤマハ本社工場以外の各地に今も残る5台については、もしも故障や不具合が生じた場合も公式な対応はないということになる。

## 2-6 本社設置機の撤去問題と今後の可能性

現在全国で6台(第1世代2台、第2世代4台)しか稼働していない、昭和の時代の音風景の息吹を伝えるミュージックサイレン。その中であって象徴的な存在であり、唯一現在も専任の担当者が管理・運用しているのが浜松のヤマハ本社工場のミュージックサイレンだ。このミュージックサイレンが今、撤去・廃止の危機に瀕している。設置されている本社工場4号館(戦前の建築)は、老朽化のため2019年3月に解体される予定であり、それにともないミュージックサイレンの撤去が決まっているという(2018年11月現在「撤去」の方針に変更はない)。別の屋上に移設して運用すればよいのでは、と考えがちだが、ミュージックサイレンは非常に精密かつ繊細なもので、ただ移動すればよいというものではなく、解体・移設する場合、相当の労力と専門的な技術的配慮が求められ、再稼働するためにはさらに複雑な調整が必要となるため、撤去した本体をどのようにするかについては未定だという。ミュージックサイレンは本来的には、自社工場の業務管理用の社員向け時報であり、公共的な性質を帯びているとはいえ、これを一企業が全面的に負担して保存するという事は難しい面があるのかもしれない。しかしながら、68年の長きに渡って(第2世代機に変わってからでも2019年2月で30年とな

る) 浜松市に響き続け、戦後の、平和の到来を喜んだ「時代の記憶」を今につなぐとともに、浜松市のシンボルとして市民に受け止められているミュージックサイレンが、このまま消えてしまうとすれば、実に残念なことである。

## 2-7 社員（管理・運用者）のミュージックサイレンへの想い

最後に管理・運用を担当している関連部署の職員 3 名にミュージックサイレンへの個人的な想いをそれぞれうかがったので、以下に紹介したい。

「長い期間に渡り工場周辺の浜松市民に親しまれましたが、これ（撤去）も時代の流れで仕方が無く受け止めざるを得ないと考えています。この後はヤマハの歴史の 1 ページとしてだけではなくこの地域文化の歴史としてどの様な形で後世に伝えられるか会社と一緒に模索していきたいと思えます。」

「ミュージックサイレンを語る時には何時も伝えておりますが、私自身地元で生まれ育ち毎日自宅でもこのミュージックサイレンの音色が聞こえます。幼い頃、に他の地域へ出掛けた時その時間に聞こえないことに気づき、幼心に寂しさを感じました。それ程までに地元の人間にとっては当たり前前の時報であり心に刻まれた音楽です。小学校の音楽の授業でクラシックを聞いたときに、ミュージックサイレンで聞いている曲には殆どの生徒が親しみを持ち話題にもしていたことも思い出します。平成 12 年 3 月 1 日より 6 回（6 曲）／日より 3 回（3 曲）／日に変更しています。その時、中止した曲には私の母親（92 歳）も好んだ故郷という名曲も入っておりました。たまたま縁あって現業務（本社の設備管理）の中でこのミュージックサイレン保守業務に携わることができ幸せだと思えます。私自身にとっても一生涯忘れられない大切な音ですが、同設備を弊社の貴重な財産としてできる限り次世代に引き継いでいきたいと思えます。」

「自分は楽器としてこんなに多くの方に演奏（吹鳴）を聴いてもらえた楽器はないんじゃないかと思っていますし、

地域の人々の暮らしの中に溶け込んだ楽器は他にはないと思っています。ヤマハの歴史の中にこんな素晴らしい楽器も存在したんだと言う事は後世に伝えていきたいと思えます。」

ミュージックサイレンが、社員の方々の深い愛着と誇りのもとに管理・運営されていることをあらためて感じる。

## 2-8 ミュージックサイレンとは何か

8 月の調査の際に訪れたヤマハ本社新社屋内に開設された企業内博物館「ヤマハイノベーションロード」では、1887 年創業のヤマハが取り組んできた事業と製品を一望に見ることができる。その中の最奥の壁にあるのがヤマハ事業の継承と発展を示した系統図「INNOVATION ROAD MAP」だ（図 4、5）。その系統図を見ると、興味深いことに、1951 年に事業としてスタートしたミュージックサイレンは、その後どの事業にもつながることなく、孤立した流れとしてそこで止まっている。ヤマハの事業として、現在のどこにもつながっていないというのが、同社の認識のようである。だが、本当にそうだろうか。筆者はそうは考えない、公共空間に流す信号音（それはおのずと公共的な性質を持つ）をデザインするという発想は、その後 30 数年を経てヤマハによる駅の発車メロディのデザインとして、JR 新宿駅と渋谷駅に復活し、その流れが（ヤマハの手を離れて）全国に広がり現在にまでつながっている。

このことについて管理・運用担当者に尋ねると、「ミュージックサイレンからメロディバルへの技術提供や人材交流はなく、登場した社会的背景も違うので直接の関係はない。」としつつも、「公園やリゾート地、商店街、学校、工場など“コミュニケーションゾーン”と云われるスペースで心のふれ合いがより大切にされてきました。このサイレンがそれぞれの場所で愛され多少なりとも役割を担ってこれたなら良かったです。」といった感想が聞かれた。当時のカタログ<sup>36</sup>には「人々の心のふれ合いをより確かなものにする“コミュニケーションサウンド”」としてミュージックサイレンが位置づけられており、これは公共空間のサウンドデザインにつながる発想であったともいえる。別

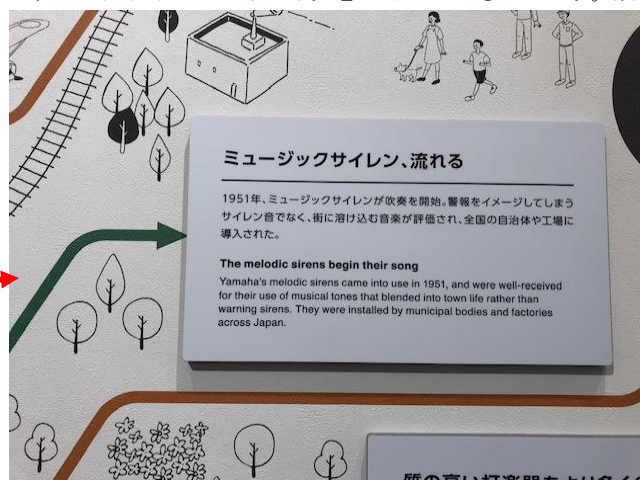


図 4・5 ヤマハ「イノベーションロード」内に掲示された「INNOVATION ROAD MAP」。1951 年のミュージックサイレンはそこで流れが行き止まりになっている。図 4 写真中丸い線で囲んだ部分を拡大した写真が図 5。（図 4 撮影／上野正章）

の担当者からは「(ミュージックサイレンとメロディベルは)どちらも音環境問題と言う社会課題に対するヤマハとしての解決策の提案であった事は間違いないと思います。その文脈で言えば実は、サイレントシリーズ(ヤマハの消音システム搭載楽器の総称)も同じなのかもしれません。」という回答があった。事業上のつながりはそれぞれ別であったとしても、そこには楽器製造企業による「音環境への取り組み」という共通の理念があったという意味で、ミュージックサイレンは現代社会のニーズへとつながっているのである。

最後に、あらためて、楽器としてのミュージックサイレンという原点に立ち返ってみたい。管理運営社員の「楽器としてこんなに多くの方に演奏(吹鳴)を聴いてもらえた、(中略)地域の人々の暮らしの中に溶け込んだ楽器は他にはない」という言葉に見られるように、ミュージックサイレンは楽器であって、オルゴールやからくり時計、ピアノロールなどと同様に自動演奏楽器の系譜につながるものであるともいえる。私たちは、楽器というと「音楽を演奏する」ための道具と誤ってしまいがちだが、じつは公共空間にメッセージを伝えるための信号音としての楽器(音具を含む)の伝統は「太鼓」「鐘」「カリヨン」「法螺貝」「ポストホルン」など脈々と続いてきたのであり、「ミュージックサイレン」はそうした楽器による信号音の現代における後継者なのだともいえるだろう。

地域のシンボルであり、戦争と平和の記憶をつなぎ、昭和の音風景を伝え、信号音としての楽器の伝統を今に受け継ぐミュージックサイレンが、今後も何らかの形で浜松の街に響き続けることを願ってやまない。

(兼古勝史)

<sup>1</sup> 浜松市・浜松市観光協会『浜松市案内 観光と産業』浜松市・浜松市観光協会、[1967年]、unpaged.

<sup>2</sup> ミュージックサイレンの先行文献として兼古勝史「ミュージックサイレン 平和の時代を告げた時報」『B-maga』2018年10月号、サテマガ・ビー・アイ、2018年、p.51がある。適宜参考にした。

<sup>3</sup> 調査において視聴したNHK制作の番組に基づく。

<sup>4</sup> 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、pp.112-113.

<sup>5</sup> 同書、p.113.

<sup>6</sup> 同書、p.113.

<sup>7</sup> 同書、p.113.

<sup>8</sup> 詳細は、胃の飢ゑ飽き踏み『技術エッセイ 技術と洒落とエスプリと』静岡学術出版、pp.266-277.

<sup>9</sup> 本間彦作。

<sup>10</sup> 無記名「音楽的な工場サイレン 浜松の日本楽器で新考案」『静岡新聞』昭和25年、静岡新聞社、1950年。

<sup>11</sup> 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

<sup>12</sup> 当日配布資料：ヤマハ株式会社『日本サウンドスケープ協会様 ミュージックサイレンご紹介』ヤマハ株式会社、2018年より引用。なお、曲目や時間は現在のものであり、吹鳴回数を含めて過去の変更が行われている。

<sup>13</sup> 醉山義則「私たちの名物 音楽サイレン 楽器の町に鳴りひびく」『読売新聞』昭和28年1月13日、読売新聞社、

1953年。

<sup>14</sup> 同書。

<sup>15</sup> 同書。

<sup>16</sup> 同書。

<sup>17</sup> 同書。

<sup>18</sup> 国外は台湾とフィリピンの日本領事館に設置された。

<sup>19</sup> 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

<sup>20</sup> 無記名「楽しい音楽サイレン 銀座にお目見え」『毎日新聞地方版』昭和26年12月13日、毎日新聞社、1951年。

<sup>21</sup> 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

<sup>22</sup> 無記名「楽しい音楽サイレン 銀座にお目見え」『毎日新聞地方版』昭和26年12月13日、毎日新聞社、1951年。

<sup>23</sup> 無記名「岸和田にミュージックサイレン」『読売新聞地方版』昭和29年、読売新聞社、1954年。

<sup>24</sup> 上野市のミュージックサイレンに関しては、次の記事を参照。無記名「美しい音を響かせて 上野市に音楽サイレン」『伊勢新聞』昭和34年、伊勢新聞社、1959年。

<sup>25</sup> 同書。

<sup>26</sup> 音楽的意味に着目した標識音の研究に、箕浦一哉「『夕方5時のチャイム』の公共性：山梨県富士吉田市の取り組みから」『日本サウンドスケープ協会2013年度秋季研究発表会論文集』日本サウンドスケープ協会、2013、pp.1-5.がある。

<sup>27</sup> 調査日以後のメールによる質問への回答。ミュージックサイレンの日常的な管理・運用者であるヤマハファインテック株式会社FA事業部技術部技術グループ主事野尻竜章氏及び、株式会社ヤマハビジネスサポート総務事業部事業所管理部部長 兼 本社事業所管理センター長 大石幸作氏、同本社事業所管理センター 杉山進氏による。

<sup>28</sup> 当日配布資料：ヤマハ株式会社『日本サウンドスケープ協会様 ミュージックサイレンご紹介』ヤマハ株式会社、2018年、p6、「歴史と経緯」より。

<sup>29</sup> ヤマハファインテック株式会社FA事業部技術部システム技術グループ主事野尻竜章氏からご提示いただいた「旧型ミュージックサイレン納入状況表(昭和26年から昭和57年)」による。

<sup>30</sup> ヤマハファインテック株式会社FA事業部技術部システム技術グループ主事野尻竜章氏による。

<sup>31</sup> 日本サウンドスケープ協会浜松研究会 兼古、小林田鶴子による調査。

<sup>32</sup> 浜松市内在住の日本サウンドスケープ協会会員(浜松調査参加者)による証言。

<sup>33</sup> 脚注27に同じ。

<sup>34</sup> 総務事業部事業所管理部本社事業所管理センター 杉山進氏による。

<sup>35</sup> 脚注28に同じ。

<sup>36</sup> 当日配布資料：ヤマハ株式会社生産技術統括部メカトロ精機部『ヤマハミュージックサイレン』カタログ、1989年。

※この論文は2018年12月2日(日)に青山学院アスタジオ(東京都渋谷区)で開催された「日本サウンドスケープ協会2018年度秋季研究発表会」における企画セッション「第2部・浜松研究会報告」報告2：ヤマハ本社のミュージックサイレンの配布資料である。